

特別展「2012年の自然遊学館の出来事」

場所：貝塚市立自然遊学館特別展示会場（元関空交流館）

期間：2013年2月9日～3月24日

昨年、『2011年の自然遊学館の出来事展』を開きましたところ、多くの皆様から好評の声をいただき、職員一同たいへん喜びました。また来年も開催できることを胸に抱き、記録の収集に努めてまいりました。

自然遊学館が季節ごとに発行している季刊誌『自然遊学館だより』を見ていただければわかるように、当館には生きものに関する新しい発見や新しい記録が多く寄せられてきます。今回、その一部を皆様に見ていただき、2012年を振り返っていただこうと思います。

貝塚市立自然遊学館がこの地に誕生してから20年になります。その間、貝塚の生きものに関する調査を続けてきました。また、市民の皆様からの情報も大変多く寄せられました。これらの記録は、貝塚市の自然を把握するためには大へん重要なものと自負しています。20年間の出来事展は20周年の年に譲ることにして、昨年に引き続き2012年を振り返り、自然遊学館の一年間の出来事を紹介しました。

2013年2月

館長 高橋 寛幸



展示会場の様子

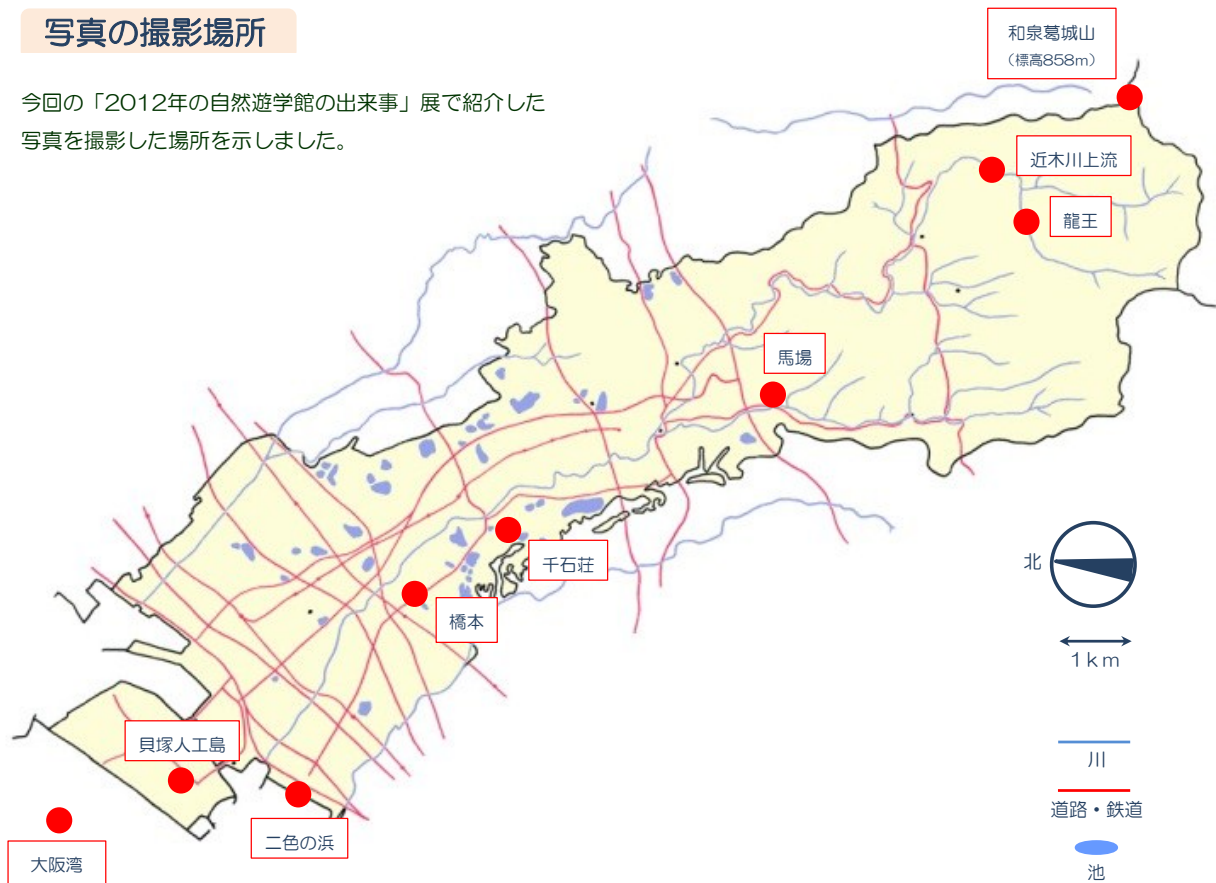


展示写真の解説

以下で紹介する出来事と写真は、すべて貝塚市内で撮影されたものです。それぞれの出来事について、タイトル、撮影日、撮影場所、1行コメント、分類群（目と科）、解説文、写真、写真提供者（撮影者名がない写真は自然遊学館の職員が撮影したものです）を示しました。

写真の撮影場所

今回の「2012年の自然遊学館の出来事」展で紹介した写真を撮影した場所を示しました。



この報告に掲載した出来事以外にも、貝塚市の自然を把握する上で重要な出来事があり、それらは、本冊子「貝塚の自然第16号」の他の報告や、自然遊学館だより No. 63～No. 66 で紹介しています。自然遊学館だよりのバックナンバーは、自然遊学館ホームページ上で閲覧可能です。よろしければネイチャーレポート、泉州生きもの情報、あるいは寄贈標本のコーナーなどをご覧ください。

ヌートリア死体・・・2012年1月22日、二色の浜

二色の浜で特定外来生物の死体発見！

ネズミ目ヌートリア科

常道武士・暢子さんご夫妻から、二色の浜に大きなネズミの死体が打ち上がっているという情報をいただき、撮影・採集に行きました。尻尾の先まで、全長が 85 cmもありました。農作物の害獣として、および、畔や堤防に巣穴を掘って強度を落とすという理由などから、環境省によって特定外来生物に指定されています。原産地は南アメリカで、もともとは毛皮をとるために持ち込まれたものです。



ヌートリア死体

ウシガエル・・・2012年2月4日、自然遊学館（飼育）

あの頃は元気に食べてウンコしていたなあ～

カエル目アカガエル科

来館者の方が突然「ワー」とか「キャー」と声をあげるのは、たいていウシガエルでした。小さな子供を泣かせたりしたこともありました。大きなアメリカザリガニも一飲みだったのに。水を替える時にさわると、いじけたようなそぶりを見せたり。そんなウシガエルも、夏に体調をこわし、10月に永眠しました。特定外来生物に指定されて「悪者」扱いされているウシガエルでも、長年世話をしていると愛着がわきます。



飼育していたウシガエル

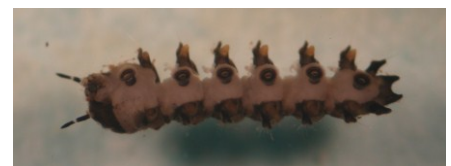
* 特定外来生物は、飼育・運搬・保管が禁止されています。このウシガエルは、環境省近畿地方環境事務所の特別な許可を得て飼育していました。

アミカ科幼虫・・・2012年3月12日、近木川上流（蕎原）

かわいい？気色悪い？水生昆虫

ハエ目アミカ科

近木川上流のそばら山荘付近で採集しました。頭のように見える部分は、頭、胸、腹の一部が融合したものです。腹側の6個の吸盤が特徴的です。これを使って岩や石にへばりついているので、網ですくうだけのこれまでの調査では、採集できなかったのでしょう。餌は、岩や石の表面に付いた藻類です。環境省が定める「水生生物による水質判定」で、水質階級Ⅰ（きれいな水）の指標生物に選ばれています。



ヤマトアミカ属の一種の幼虫

ハイロチュウヒ・・・2012年3月16日、貝塚人工島

人工島で新たな猛禽発見

タカ目タカ科

綿石慶太さんから貝塚人工島にハイロチュウヒが生息しているという情報をいただき、食野俊男さんに撮影を依頼していたものです。主にヨシ原に生息します。そのヨシ原の減少とともに、個体数が減少していると言われています。自然遊学館の貝塚産鳥類の記録として188種目となりました。貝塚人工島には放置されたままで草むらになった空地があり、意外に「豊かな自然」があります。



ハイロチュウヒ
(食野俊男さん撮影)

ヤドリギ・・・2012年3月21日、和泉葛城山 → 自然遊学館

寄生植物が本性を現す

ビャクダン目ヤドリギ科

4月14日、ヤドリギの種子から寄生根を伸ばして、ブナの生木に侵入しようとしているところです。3月21日に和泉葛城山山頂のブナに寄生したものから果実を採集して種子を取り出し、自然遊学館前のブナに貼り付けたところ、4月12日までは何の変化もなかったのですが、その2日後に寄生者としての「本性」を現しました。現在、種子本体は脱落して、寄生根の部分だけ残っています(約4mm)。常緑なので緑色のままです。



写真中央がヤドリギの種子

* ヤドリギは、寄主植物から養分と水分を得ていますが、自らも光合成によってエネルギーを得ることができるので、「半寄生植物」と呼ばれています。

コフジガイ・・・2012年3月29日、大阪湾

シャコの脚にすがりつく二枚貝

マルスダレガイ目チリハギガイ科

大阪湾でとれたシャコの脚にコフジガイという二枚貝が付着していました。それを岡村親一郎さんと児嶋格さんに寄贈していただき、自然遊学館の玄関の大阪湾の魚水槽で飼育展示しました。シャコは脱皮して成長するので、脱皮の際にコフジガイはどうなるのか、もしシャコを離れてしまったら、コフジガイは生きることができるかなど、分からないことがたくさんあります。



写真中央がコフジガイ

カヤラン・・・2012年4月5日、和泉葛城山登山道

嵐の後は採集に良い？

ラン目ラン科

カヤランはラン科の着生植物で、根が大きな木の幹や枝に張り付くようにして、ぶら下がっています。おそらく4月3日の強風で寄主植物の枝ごとが登山道に落ちたのだと思います。それを自然遊学館に持って来てくださった方がいます。嵐の後は見つけ時という植物もあるのです。ミズゴケのマットで水分を不足させないように育てると、4月20日に可憐な花を付けました。花は枯れましたが、まだ自然遊学館で育てています。



カヤラン

シロヒナノチャワンタケ・・・2012年4月13日、和泉葛城山 ブナのどんぐりに生えるキノコ

ビョウタケ目ヒナノチャワンタケ科

場所は和泉葛城山山頂の石段脇です。スギの木の朽ちた切り株上に積もった落ち葉をどけると、ブナの殻斗(どんぐりの殻)が数個ありました。その中の2個から白い小さなキノコが生えているのを見つけました。初めて見るものだったので、珍しいものかと思ったのですが、図鑑で調べると「普通」と書かれていました。その後、石段脇の別の場所でも、このキノコを見つけました。石段脇だけに限ると、普通種のようなです。でも、ブナの殻斗はどこにでもあるものではないですね。



シロヒナノチャワンタケ

タンポタケ・・・2012年4月28日、和泉葛城山Bコース

キノコの世界も厳しい

ボタタケ目バツカクキン科

春の和泉葛城山登山で参加者の西浦いちかさんが見つけたキノコです。ふつうキノコは朽木や腐植から生えますが、タンポタケはツチダンゴ類(ユーロチウム目ツチダンゴ科)という土の中に生える別のキノコから生えるキノコなのです。土の中だけに生えるキノコもいれば、キノコに寄生するキノコがいるのです。寄生する相手は虫ではありませんが、冬虫夏草の一種に含められています。



タンポタケ

ギンラン・・・2012年5月8日、千石荘

千石荘で絶滅危惧植物を発見

ラン目ラン科

上久保文貴先生と一緒に、千石荘の植物を調査していて、見つけました。下草が刈られた雑木林の林床などに生えるため、手入れされない雑木林が増えると、この植物は減ってしまいます。大阪府レッドデータブックでは、「個体数が少ないのに、園芸用に採集されている」という理由で、要注目というランクに指定されています。千石荘にはいろいろな宝物があります。



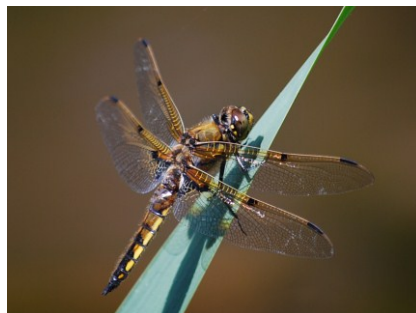
ギンラン

ヨツボシトンボ・・・2012年5月16日、馬場

珍しいトンボをバッチリ撮影

トンボ目トンボ科

喜多理恵さんが馬場の農業庭園たわわの小池で撮影したものです。名前の由来となった翅の前縁中央部の4個の紋が良く撮れています（前縁先端部の紋はすべてのトンボにあります）。西日本では産地が限られ、貝塚市内では馬場でしか確認されていません。しかも春先にしか見られない印象があります。それをこんなにバッチリ撮影できたなんて、うらやましいです。自然遊学館の標本としては1996年に成虫1個体、2001年に成虫1個体と幼虫1個体しか得られていません。



ヨツボシトンボ
(喜多理恵さん撮影)

アケビコノハ・・・2012年5月16日、千石荘

目玉模様は何のため？

チョウ目ヤガ科

どこが頭でどこが尻か分かりますか。正解は右上が頭です。胸にある目玉模様は、鳥などの捕食者を驚かさす効果があると言われています。幼虫の餌植物はアケビ類で、千石荘にはアケビが多く生えています。成虫の前翅は枯葉そっくりで、後翅には目玉に見える模様があります。それでふだんは前翅をたたんで、捕食者に襲われると前翅を開いて後翅の目玉模様を見せるのです。



アケビコノハ幼虫



アケビコノハ成虫

ヤノクチナガオオアブラムシ・・・2012年6月7日、千石荘

固い大木の幹から吸汁するアブラムシ

カメムシ目アブラムシ科

サクラの樹幹にトビイロケアリの蟻道(覆い)が出来ていて、その一部を壊すとヤノクチナガオオアブラムシがいました。名前の通り、長い口吻を持っていて、サクラの樹幹も何のその、汁液を吸っていました。その尻から出る甘露(ほとんどは糖類から出来ている)をアリに与え、その代わりにアリに守ってもらっているのです。しかも覆いのある蟻道内で保護されているのだから、とても安全に生活できているわけです。ふつうアブラムシの仲間は葉や若い枝など、植物の柔らかい部分から汁液を吸うのですが。



ヤノクチナガオオアブラムシ

キノコヒモミノガ幼虫・・・2012年7月18日、千石荘

そのミノ、長すぎないですか？

チョウ目ミノガ科

2011年の調査時に、サクラの樹幹に生えたハカワラタケに細長い蕨がいくつかぶら下がっている変な！光景を見つけました。でも何か分からなかったのです。その後、杉本美華さんの論文を読み、キノコヒモミノガであることが分かりました。2012年5月16日に当地で幼虫が頭を出した蕨を見つけ、自然遊学館で飼育し、約2ヶ月後の7月18日に成虫が羽化して、キノコヒモミノガであることが確実にになりました。



キノコヒモミノガ蕨



キノコヒモミノガ成虫

オオツノトンボ・・・2012年7月24日、和泉葛城山

かくれんぼしているつもり？

アミメカゲロウ目ツノトンボ科

食野俊男さんと和泉葛城山山頂へ鳥類の調査に行った際に、山頂付近の草むらで見つけました。横に飛び出しているのが腹部で、下に向いているのが翅です。ツノトンボ科の仲間は、名前の通り、長い触角が特徴です。幼虫は小さな虫などを捕まえて食べます。成虫は水を飲む程度です。1998年7月4日に黒子浩先生によって同所で1個体が採集されて以来、自然遊学館所蔵として2個体目の標本となりました。



オオツノトンボ

コシロシタバ・・・2012年8月9日、千石荘

千石荘で絶滅危惧昆虫を発見

チョウ目ヤガ科

大阪府レッドデータブックで、「森林伐採による生息環境の消滅・悪化、宅地開発等に里山の開発」による減少が理由で、準絶滅危惧に指定されています。これまで自然遊学館に記録がなかったのに、8月の調査では1本のクヌギの幹に5個体も止まっていました。9月の調査でも、やや離れた別のクヌギの幹に1個体止まっていました。前翅が地味で樹皮に溶け込み、後翅は派手な「カトカラ」の仲間です。



コシロシタバ標本

ムスジイトトンボ・・・2012年9月9日、馬場

馬場で75種目のトンボを発見

トンボ目イトトンボ科

鈴子佐幸さんが馬場の農業庭園たわわの小池で撮影されたもので、これまで自然遊学館に記録がなかった種です。自然遊学館の貝塚産トンボの記録として、市内75種目となりました。クロイトトンボやセスジイトトンボと同じ属で、特にセスジイトトンボと似ていますが、少し模様が違います。頭部の後ろや目の周りの模様の違いで見分けることができます。



ムスジイトトンボ
(鈴子佐幸さん撮影)

イヌセンボンタケ・・・2012年9月11日、和泉葛城山

名前の通り千本あるかな？

ハラタケ目ナヨタケ科

春から夏にかけて倒木や切り株に群生します。図鑑には世界に広く分布すると書かれていますが、見たのは初めてです。胞子が成熟する前の白い段階です。毒はないですが、まずいので「イヌ」という名前が付いたのでしょう。写真はちょうど千本ぐらいですが、図鑑にはもっと大きな群落が紹介されています。



イヌセンボンタケ

シロマダラ・・・2012年9月25日、橋本

橋本で絶滅危惧のへびを発見

へび亜目ナミへび科

実森武彦さんが橋本で発見し寄贈してくれました。体長は23cmでした。自然遊学館の記録として貝塚市内で8種目のへびになります。首をS字に曲げて毒蛇の「まね」をするので、実森さんは最初、見かけないへびなので、もしかしたら外来種の毒蛇かと思われたそうです。本当は小さいおとなしいへびで、ほとんどトカゲしか食べないそうです。自然遊学館で飼育している時には、ニホントカゲの幼生を食べました。



シロマダラ

オツネントンボ・・・2012年10月6日、和泉葛城山

これから越冬します

トンボ目アオイトトンボ科

オツネンは漢字では「越冬」と書きます。成虫で越冬するという意味です。トンボはふつう幼虫で越冬し、卵で越冬する種も少しいますが、成虫で越冬する種は日本では3種しか知られていません。2011年の調査では同所で11月に撮影だけして逃げられました。撮影と採集の両方を欲張ってしまい失敗しました。1993年に馬場と森で1個体ずつ採集されていて、自然遊学館の標本としては3個体目となりました。



オツネントンボ

キアシナガバチ・・・2012年10月9日、千石荘

おもちゃみたい？

ハチ目スズメバチ科

真横から撮ると、おもちゃみたいに写りました。かなり大きな個体であることと、時期から判断して、おそらくこれから単独で越冬する女王バチだと思います。キアシナガバチはセグロアシナガバチと同じくらいの大きさで、最初はセグロアシナガバチだと思ったのですが、黄色のきれいな紋がたくさんあること、触角の先が黒っぽくなることから、キアシナガバチだと分かりました。



キアシナガバチ

クロバイ大木・・・2012年10月15日、千石荘

大木は千石荘の宝物

カキノキ目ハイノキ科

2012年の秋から千石荘で上久保先生と大木調査を始めました。大木は、何十年とその場所で生きてきた宝物です。千石荘で大木と言えば、落葉樹ではクヌギやアベマキ、常緑樹ではクスノキやヤマモモなどが思い浮かびますが、このクロバイもご覧の通り、大木になります。写真の木は、横に突き出た大枝があまりにも太く、アンバランスなのでびっくりしました。常緑樹で、春に花が咲きます。



クロバイ大木

ブナ林紅葉・・・2012年11月20日、和泉葛城山

紅葉の時期は一瞬

ブナ目ブナ科

和泉葛城山のブナ林で秋に行事を企画すると、昆虫から紅葉、紅葉から鳥か雪の移ろいが急で、しかも年ごとに時期がずれることが問題になります。昨年は11月下旬に紅葉し、この20日後には、一面積雪で銀世界となりました。紅葉の美しい時期は一瞬なのです。下界で暮らしていると、そのような世界があることにはあまり気付きません。人間の社会だけがこの世に存在していると思いつまむから、みな息詰まってしまうのでしょうか。



ブナ林の紅葉

カヤクグリ・・・2012年11月20日、和泉葛城山

今年もやってきました

スズメ目イワヒバリ科

毎月行っている和泉葛城山山頂の鳥調査で食野俊男さんが撮影しました。ミヤコザサの藪の中でいました。元々明るい場所にはあまり出てこない鳥なのです。それで大阪では冬だけにやってくる冬鳥です。もっと北の地方からやってきて、春先に帰って行きます。クロジかなと思ったのですが、南港野鳥園にお勤めの和田太一さんにカヤクグリと同定していただきました。



カヤクグリ

(食野俊男さん撮影)

コナラ紅葉・・・2012年12月3日、千石荘

ステンドグラスみたい

ブナ目ブナ科

コナラの樹冠を見上げると、色とりどりの紅葉に覆われていました。秋になると葉が落ちるものだと思っていましたが、意外に葉が落ちる時期は遅いようです。でも林床にも葉が落ちているので、それはアベマキやクヌギの落葉かもしれません。これまで落ちていく葉に関心を持っていなかったのですが、大量に落ちるブナ科の葉から雑木林の食物連鎖は始まり、生きた土壌と言われる腐植が形成されます。春まで落ちないコナラの枯葉があるなんて、ちょっと注意不足でした。



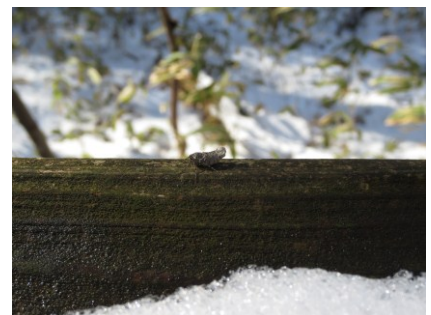
コナラの紅葉

フユシャク♀・・・2012年12月13日、和泉葛城山

これが蛾のメスなの？

チョウ目シャクガ科

和泉葛城山の山頂の木道の手すりにいました。背景に写っているのは雪です。フユシャクは、冬に成虫が活動するシャクガという意味です。冬に活動する点でも変わり者ですが、メス成虫が写真のように翅がないという点でも変わっています。オス成虫は普通の蛾のように翅があります。オスとメスが出会うためには、両方とも移動能力が高い必要はないのですが……。このメスは案外めんどくさがり屋なのかもしれません。



フユシャク♀

テン足跡・・・2012年12月13日、和泉葛城山

雪上に足跡を残す

ネコ目イタチ科

雪が積もった和泉葛城山の山頂のブナ林内で、足跡を見つけました。体長は両足をそろえた足跡が飛び飛びにあれば、それはテンの足跡です。尾の先まで60～80センチで、雑食者のテンですが、雪の中ではどんなものを食べているのでしょうか。雪がない季節では、道の真ん中に糞があれば、それもテンのサインです。足跡や糞では確認していますが、まだ山頂で生きた姿を見たことはありません（自然遊学館では剥製を展示しています）。



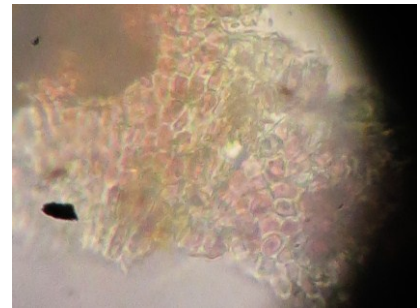
テンの足跡

タンスイベニマダラ・・・2012年12月15日、龍王（蕎原）

長年の想いがかなう

ベニマダラ目ベニマダラ科（紅藻植物）

奥昌之さんから「タンスイベニマダラではないでしょうか。龍王の湧水にたくさん生えていたのですが、1個だけ石を拾ってきました」という情報提供と寄贈を受け、現地に撮影に行きました。その後、新潟大学教育学部の志賀隆先生に、正式に同定していただきました。奥昌之さんは、この紅藻植物に15年前から興味を持ち、ずっと探していたそうです。それを泉州で発見できた喜びを遊学館だよりに執筆していただきました。タンスイベニマダラが生えるのは龍王の湧水の水質が良い証拠です。



タンスイベニマダラ
(実体顕微鏡で撮影)

以上、自然遊学館の2012年の出来事展において展示した写真の紹介をさせていただきました。その他、汽水ワンドの資料、和泉葛城山昆虫調査速報、2012年の行事写真、貝塚市内のカタツムリの標本・写真（児嶋格氏提供）などを展示しました。